

# ひたちなか 埋文だより 47



**編集後記の笑う埴輪** 前号の表紙に登場した忍者を追い、捕り方が駆けつけたというイメージで表紙の写真を構想してみたのだが、小道具や衣裳が追い付かなかった。御用提灯は調達できず、和装は甚平が限界であった。借用した提灯には、よりによって「しあわせ」の文字が書かれていた。甚平を着た女子大生が、縄文時代の石剣せつけんを持って「しあわせ」をアピールするという、なんとも不思議な写真をお届けしたい。

(2017.8.25 撮影 博物館実習「女子大生と甚平」第1弾)

CONTENTS	<b>速報！ 鷹ノ巣遺跡第4次調査／「ふるさと考古学」で発掘調査の体験をしました！</b>		
	<b>「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第19回 遺跡の保存と整備</b> (川崎純徳)		
	資料紹介 <b>十五郎穴横穴墓群指洪支群出土の土器</b> (佐々木義則)		
	1ケース・ミュージアム 43 <b>平成 28 年度鷹ノ巣遺跡発掘調査速報展</b>		
	1ケース・ミュージアム 42 <b>貝殻で付けた文様</b>	遺跡めぐり <b>栃木県の貝塚散歩</b>	
	ひたちなか市の古墳⑩ <b>津田西山古墳群</b>	横穴墓を歩く⑩ <b>桜小路横穴墓群</b> (鈴木朋子)	
	歴史の小窓⑩ <b>身分相応の器</b>	虎塚古墳花便り⑩ <b>ギンリョウソウ</b>	ほか

# 速報！

## 鷹ノ巣遺跡第4次調査

鷹ノ巣遺跡は、ひたちなかインターチェンジのすぐ東側の台地上に位置しています。この調査は、市営たかのす霊園拡張に伴うもので、鷹ノ巣遺跡では1992・2005・2012年度につづき4度目の調査となります。調査期間は2016年5月17日から11月30日まで実施しました。調査では、住居跡16基、溝状遺構2条、土坑1基などを確認しました。今回の調査によって、鷹ノ巣遺跡では87基の住居跡が調査されたこととなります。第3次までの調査で住居跡などからたくさん貴重な遺物が出土していますが、今回の調査でもいろいろな遺物が出土しました。ここでは、調査の速報として第4次調査の成果をお知らせします。

### 鷹ノ巣遺跡 第4次調査

調査期間：2016年5月17日～11月30日

遺構：住居跡16基、溝状遺構2条、土坑1基

弥生時代後期：1基

古墳時代後期：8基

奈良・平安時代：7基

主な出土遺物：古墳時代後期の第77号住居跡からは、



出入り口部分に多数の杯形土器が重なった状態で出土しました。また、床面からコバルト色のガラス小玉1点が出土しました。さらに石炭製の玉と思われるものも検出しています。



### 鷹ノ巣遺跡調査の歴史

《第1次調査》

調査期間：1992年11月4日～1993年3月17日

遺構：住居跡28基（古墳～平安時代）

《第2次調査》

調査期間：2005年7月29日～2006年2月28日

遺構：住居跡40基（弥生～平安時代）

主な出土遺物：市内出土初の弥生時代のガラス小玉や奈良時代の文字瓦。



《第3次調査》

調査期間：2012年5月12日～7月11日

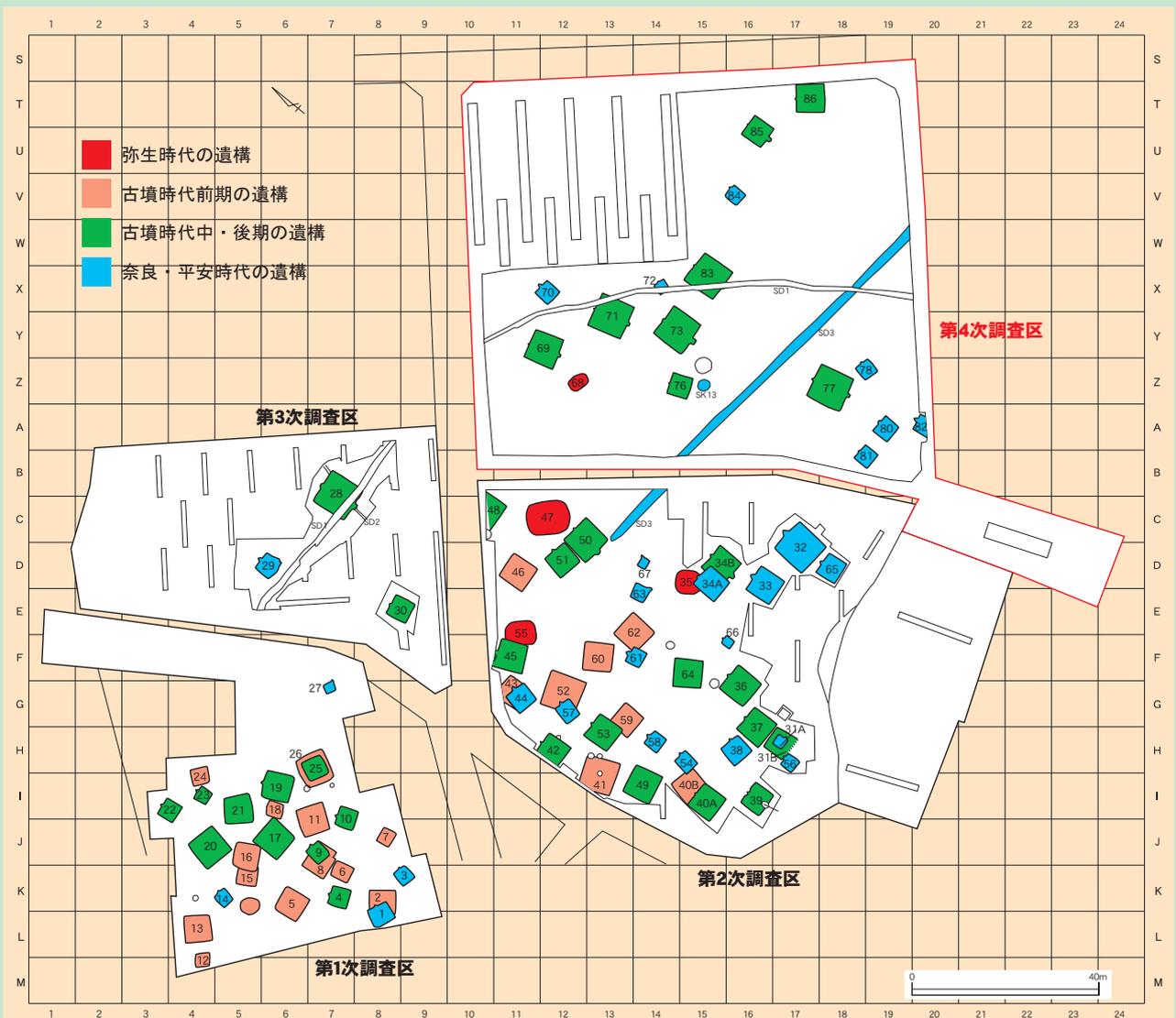
遺構：住居跡3基（古墳～奈良時代）

主な出土遺物：古墳時代後期の第28号住居跡では、杯形土器が出入り口に一列に置かれた状態で出土しました。





鷹ノ巣遺跡遠景（写真左上：那珂川河口）



鷹ノ巣遺跡遺構分布図

## 弥生時代

第68号住居跡は、弥生時代後期前半の「東中根式」土器を伴う遺構です。平面形は不整円形を呈し、壁面は竪穴中央に向かって緩傾斜状で、床面に平坦面はありません。このような平面形が不整形で、床面に平坦面がないといった特異な住居跡は、市内高野寺畑遺跡や東海村白方遺跡群などで確認されています。



第68号住居跡



高野寺畑遺跡第I-8号住居跡

## 古墳時代

古墳時代の住居跡は8基を確認し、時期はすべて後期に比定されます。8基の住居跡の内4基が一辺7mを越える大型住居跡で、このような大型住居跡が近接して4基も確認されることは希な事例です。また、甕形土器を2つ設置したと思われる竈<sup>かまど</sup>も確認しました。さらに、焼失した住居跡が多く、住居の構築材と思われる炭化材を確認できました。



第71号住居跡竈



第77号住居跡炭化材出土状況

## 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、住居跡7基と溝状遺構1条、土坑1基を確認しました。第82号住居跡の調査では、竈の脇に小型の竈を併設していました。このような竈は、当遺跡のすぐ東に位置する宮後遺跡<sup>みやご</sup>第16号住居跡でも確認されています。茨城県内では他に類例のない珍しい竈です。



第82号住居跡竈



宮後遺跡第16号住居跡竈

## 小中学生体験講座

# 「ふるさと考古学」で発掘調査の体験をしました！



今回の鷹ノ巣遺跡の調査では、遺跡の活用と公開を目的として、小中学生体験講座「ふるさと考古学」で発掘調査体験などを実施しました。講座では、古墳時代後期の第77号住居跡で発掘調査体験をしたり、住居跡の床に座って「古事記」の朗読を聞いたりしました。また、第77号住居跡について、住んでいた人や家のつくりについて考えてみました。



住居跡の確認の仕方を教わる



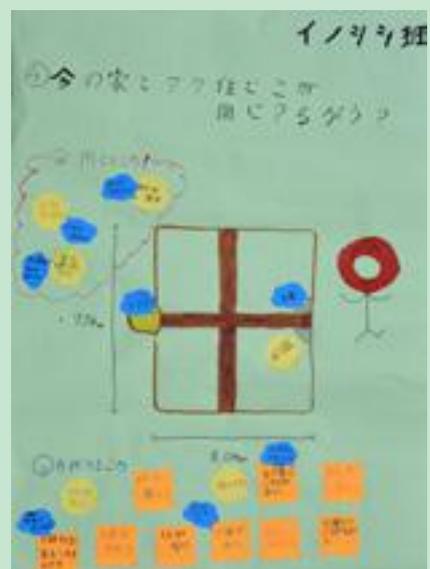
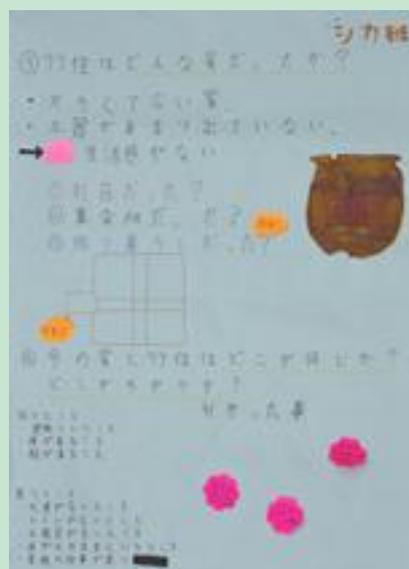
第77号住居跡の発掘調査を開始



発掘調査を体験中！



住居跡の床に座って「古事記」を聞く



遺跡での体験を振り返りながら、第77号住居跡についていろいろと考えてみました

市内の佐野中学校と大島中学校の生徒が職場体験として発掘調査を体験しました。



佐野中学校 2年生



大島中学校 2年生

ワンケース・ミュージアム 43

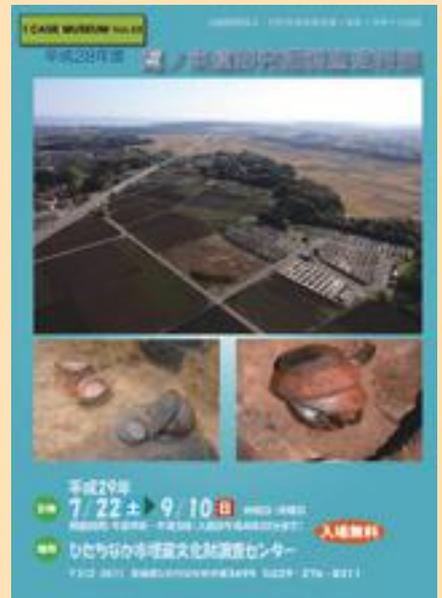
今回の展示では、二〇一六年度の鷹ノ巣遺跡の発掘調査の成果の一部として、古墳時代後期の第七七号住居跡から出土した遺物を中心に展示しました。

**第七七号住居跡**からは、ほとんど壊れていない杯が重なった状態で出土しました。これらの杯は、古墳時代後期（六世紀）のものとして推定されます。

これらの杯をみると、形や色で大きく二種類の杯にわけられます。ひとつは、口縁部（器の上の部分）が外側に大きく開くもので、ベンガラが塗られた赤い土器です。もうひとつは、口縁部の中間に段をもち、漆を塗られたと思われる黒い土器です。

これらの赤い土器と黒い土器は、当時どのように使い分けられていたのか、まだ判っていませんが、重ねた状態で住居の床面から出土していることから、当住居で同時期に使用されていた

今回の展示では、二〇一六年度の鷹ノ巣遺跡の発掘調査の成果の一部として、古墳時代後期の第七七号住居跡から出土した遺物を中心に展示しました。



たものと考えられます。

**石炭製の玉？** 今回調査しました古墳時代後期の第七一号住居跡からは、石炭製の玉と思われる遺物が出土しました。これ以外にも、同じように古墳時代後期の住居跡から多くの石炭片が出土しています。石炭製の遺物は市内では過去に出土例がなく、非常に珍しい出土遺物です。

(稲田健一)



縄文時代の早期から前期にかけて、全国的に使用されていた文様「貝殻文」についての展示を行いました。

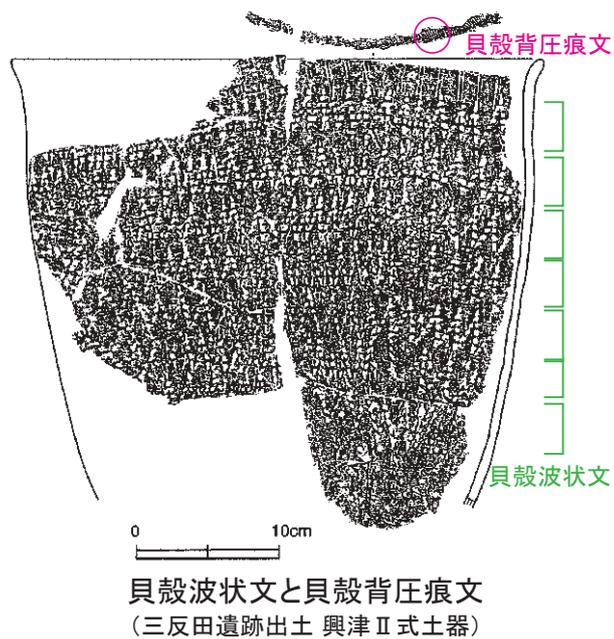
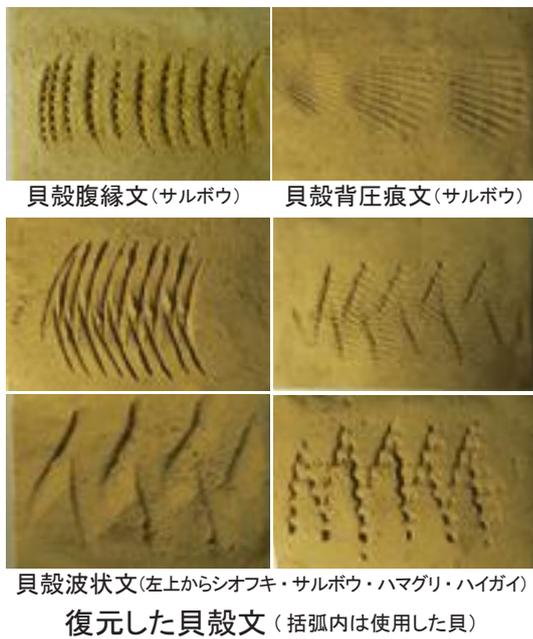
貝殻文は、文字通り貝殻を原体とする文様で、「貝殻腹縁文」「波状貝殻文」「貝殻条痕文」「回転文」などがあります。「二枚貝」や「巻貝」の一部（殻頂・腹縁・殻表を押し付ける、押し付けて引く、押す引くを繰り返す、突き刺して施文します。またロッキングといって揺り椅子のように貝を揺らしながら施文する方法もあります。

縄文時代早期から前期にかけての文様は二枚貝を使って施文されており、条痕文は全国的にみられます。早期では腹縁や殻表の圧痕文が多く、後期後葉の関東で波状文がみられるようになります。現在検出されている中で最も古いものは九州の草創期の土器で、隆帯の上に殻頂部が押されています。中期には全国的に下火になります。後期になると今度は、巻貝を使用した

文様が近畿・中国四国地方で現れ、北陸・東海地方へと広がっていき、晩期前葉まで続きます。その後、晩期後葉に再び一部地域で二枚貝を使用した文様がみられるようになります。

ひたちなか市内でみられる貝殻文は、早期の田戸下層式土器、条痕文系土器群、前期の浮島式土器、興津式土器に施されたものです。武田原前遺跡や東石川十文字遺跡などで出土する田戸下層式土器には、沈線で区画された中に貝殻腹縁文が充填されています。小川貝塚で出土する土器に多数みられる波状貝殻文は、腹縁をロッキングする方法に様々なバリエーションがあったことがうかがえます。施文具の貝種が異なるだけではなく、密に波状文を描いたものや、疎に描いたものなどがあります。一見、波状にみえないほどに密に波状文を施したものもあります。また、三反田遺跡から出土した興津Ⅱ式土器の口唇部には殻頂部が押し付けられており、体部には波状文が七段施されています。

「二枚貝」「巻貝」とは、具体的にどんな貝種なのでしょう。土器の文様に残った圧痕の特徴と、貝塚で検出された貝の種類、貝の生息条件から推測する研究が行われています。代表的なものとして、二枚貝では太い放射肋があるハイガイ・サルボウガイ・アカガイ、細い放射肋のあるアサリ、放射肋のないハマグリ・シオフキ、巻貝ではカワアイ・ヘナタリ・イボウミニナ・ウミニナなどが挙げられています。展示では、



サルボウ・ハイガイ・ハマグリなどを利用して文様を復元しました。  
(菊池順子)

貝殻波状文と貝殻背圧痕文  
(三反田遺跡出土 興津Ⅱ式土器)

## 栃木県の貝塚散歩



雨模様の五月二六日、二〇一七年度の遺跡めぐりを開催しました。千葉県、霞ヶ浦、埼玉県に続く「貝塚散歩」のシリーズで、縄文時代の遺跡や博物館を訪れます。約六〇〇〇年前が頂点の「縄文海進」で栃木県の近くまで海が入り込み、渡良瀬遊水地の周囲には貝塚が残されました。ここは、奥東京湾と呼ばれ、その最奥部に相当します。実際に見学したのは貝塚ではなく、宇都宮市の大谷寺（洞穴遺跡）、栃木県立博物館、うつのみや歴史の広場（根古谷台遺跡）の三ヶ所でした。

**大谷寺**は、平安時代の磨崖仏が「大谷観音」

の名前でよく知られていますが、防災工事に伴い一九六五年に発掘調査が実施された洞穴遺跡でもあります。ここには、「縄文海進」の時期にも生活の痕跡が残されました。シオフキ、ハイガイ、ハマグリなど海産の貝殻が検出されていて、海岸部との関係が窺えます。これらの貝殻は、食糧の残滓なのでしょう。あるいは、土器に文様を付けるための道具であったかもしれず、これが参考展示のワンケース・ミュージアム「貝殻で付けた文様」へとつながります。

**栃木県立博物館**は、歴史部門に栃木市篠山貝塚の資料が展示されています。篠山貝塚は、奥東京湾最奥部の貝塚のなかでも、一際規模の大きな貝塚です。竪穴住居跡の中にヤマトシジミを主体とする貝層が堆積した状態を、剥ぎ取られた断面で観察することができました。

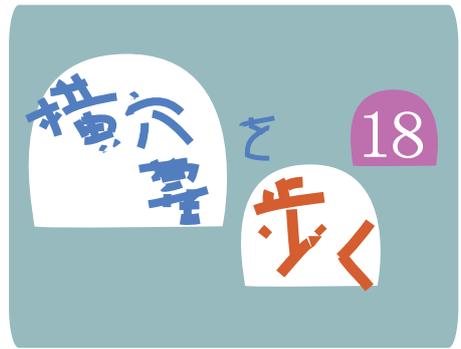
**うつのみや歴史の広場**は、根古谷台遺跡が史跡公園として整備された施設です。大型竪穴住居跡や長方形大型建物跡が検出されたことから、一九八八年に国史跡に指定されました。その後、同市古宿遺跡や足利市神畑遺跡にも検出されましたが、このような大型建物跡は、貝塚が形成された地域には見られないことに興味を覚えます。大型住居跡は、参加者全員が中に入ってもまだまだ余裕のある広さでした。公園内を散策する頃には雨も上がり、復元された長方形大型建物の前で記念撮影をしました。

（鈴木素行）



鷹ノ巣から来ました

（2017.7.26 センター玄関付近で撮影）



宮城県亶理郡亶理町  
さくらこうじ  
**桜小路横穴墓群**

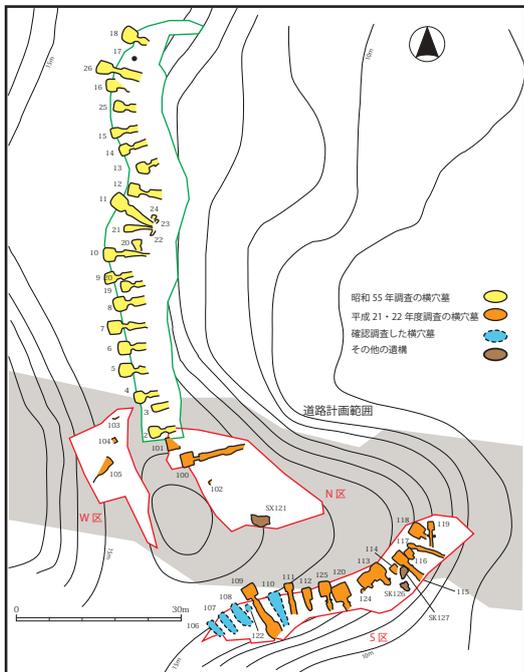
鈴木 朋子

(亶理町教育委員会)

桜小路穴墓群は、宮城県亶理郡亶理町字桜小路・字見田内、JR常磐線亶理駅から約八〇〇m西の、阿武隈高地から派生する標高三〇m程の丘陵北端部の斜面に分布する。

町内には横穴墓群が十一遺跡確認されており、本遺跡のほか堤の内横穴墓群、袖ヶ沢横穴墓群など九遺跡が町中心部以北に分布している。南に隣接する山元町を含む亶理郡域で見ると、墳墓の分布域は大きく四地域に分けられる。

本遺跡は古くから知られ、江戸時代末期に描かれた城館図にも「蝦夷穴」と表記されている。昭和五五年、遺跡北部での団地造成事業計画に伴って実施された発掘調査によって二六基の横穴墓が確認され、土器や鉄製品、玉類が出土した。その後、平成二一・二二年度に遺跡南部での都市計画道路建設計画に伴って実施した発掘



横穴墓平面分布図



横穴墓群S区全景



横穴墓群出土遺物

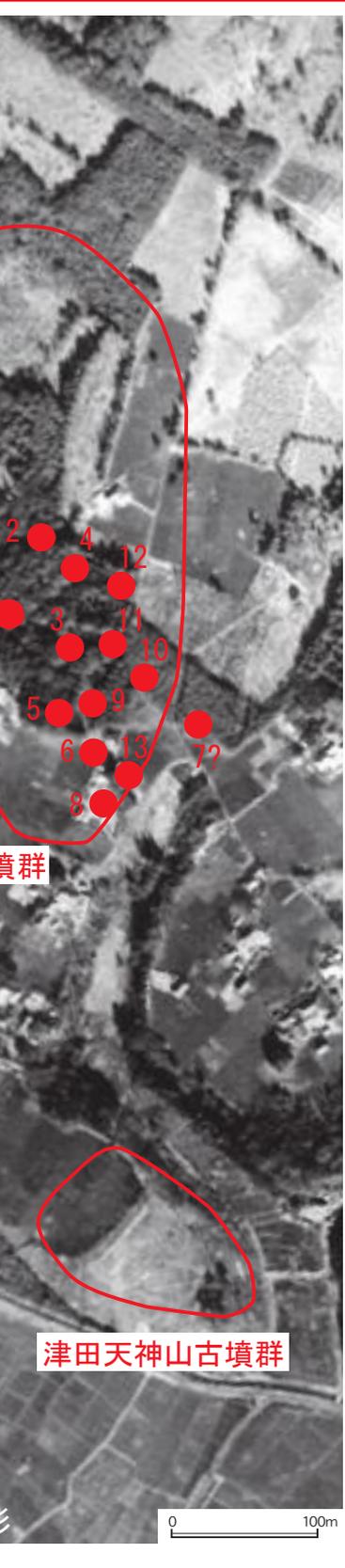
調査によって、新たに二一基の横穴墓が確認された。本遺跡北に隣接する鹿島八幡堂横穴墓群を含めると六〇基を超える横穴墓が造られたとみられ、これらは同一氏族集団の墓群であったと考えられる。

横穴墓玄室の平面形は、正方形または長方形が大半を占めるが、楕円形・扇形・逆台形のものも確認されている。規模は一辺二・三〜三・一mの大型のものと、一辺一・五〜一・七mの小型のものに分けられる。立面形はアーチ形が多く、ドーム形や台形のものもみられる。玄室には角礫の敷石をもつものがあり、玄門には閉塞石をもつものが多く、羨道は比較的長い。玄室の形態は福島県浜通り北部とほぼ同様の特徴があることから、阿武隈川河口域から太平洋沿

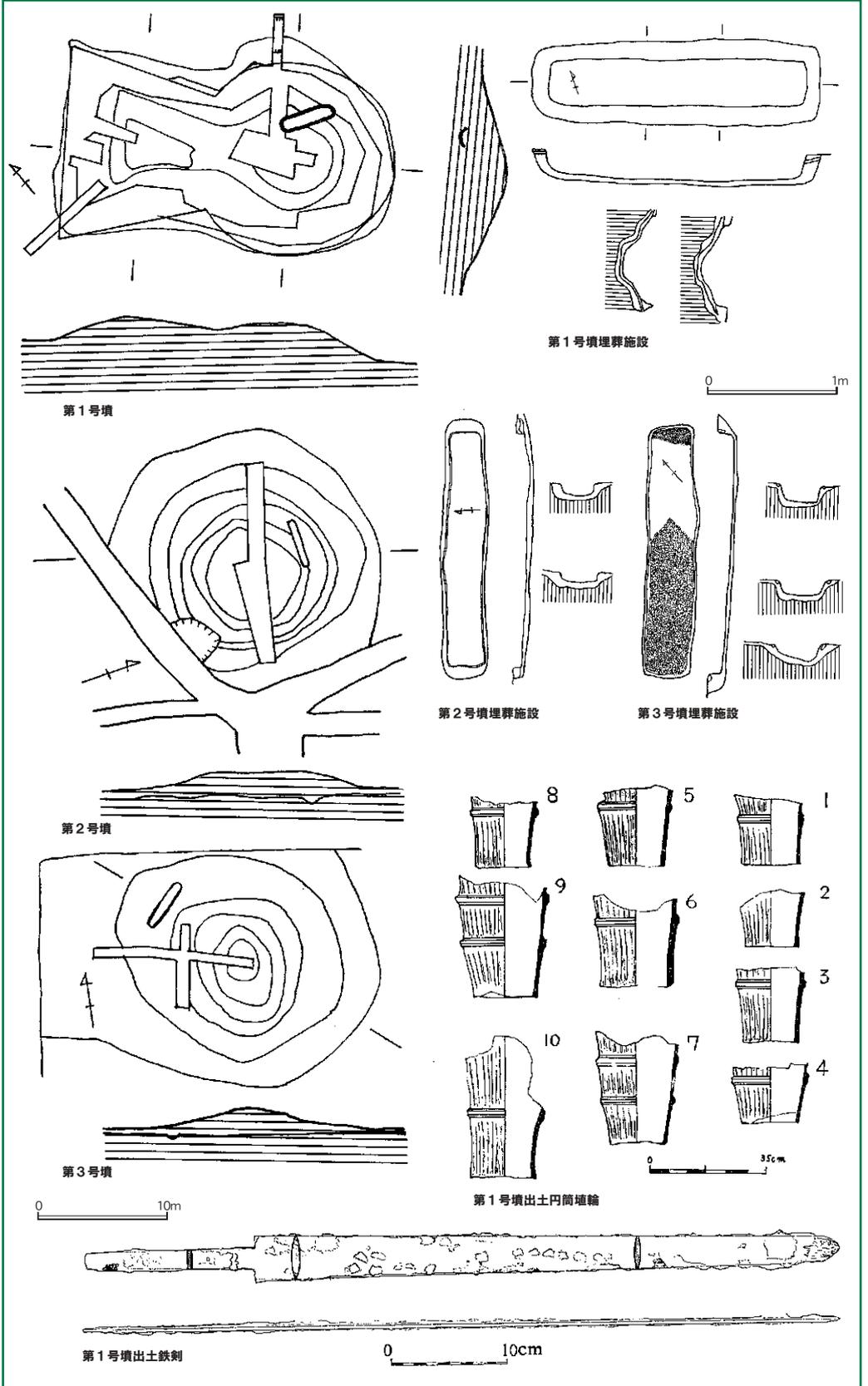
岸地域への連続性が考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器、直刀・蔽手刀・鉄鎌・耳環などの金属製品、瑪瑙製勾玉・ガラス製小玉・琥珀製棗玉・水晶製切子玉などの玉類で、おもに玄室や羨道の床面や堆積土中から出土している。

横穴墓の造営時期は、東北における横穴墓の出現期である六世紀後葉から末葉に開始し、七世紀後半から八世紀前半にピークを迎え、十世紀代には使用が終了したとみられる。「亶理（亶理）」が、郡として初めて記録されたのは養老二（七一八）年の『続日本紀』であることなどからも、被葬者は律令政府と交流をもった有力者である可能性が考えられる。



津田天神山古墳群



津田西山古墳群第1～3号墳〔大森1964〕

山古墳群古墳分布図

ある「木炭槌」は、2010年1月現在全国で61例しかない希少品内では他に類例がありません。また、分布も静岡県よりも東の地域には5例しかないという偏りがみられます〔野本2011〕。

見学ガイド

\* 津田西山古墳群は現在残っていないため、見学できません。

# ひたちなか市の古墳

## 10 津田西山古墳群

津田西山古墳群は、ひたちなか市の西部、那珂川に南面した台地上に位置しています。古墳は記録によると13基を確認していますが、現在は残っていません。発掘調査は、1963年に前方後円墳1基と円墳3基で実施しています。この調査では、水戸市などの高校の史学クラブの生徒が活躍しています。調査結果は以下のとおりです。

第1号墳は、全長25.5m、前方部幅18m、前方部高2m、後円部径16.5m、後円部高2.5mの小型の前方後円墳です。墳丘の調査では、円筒埴輪が並んで配置されている状況が確認されました。埋葬施設は、後円部の北側で確認されました。規模は外形が全長4.3m、幅1.75m、深さ62cm、内形が全長3.9m、幅1.3m、深さ59cmで、断面形はU字形を呈し、厚さ約20cmの木炭が被覆していました。この埋葬施設は木炭で覆われていることが特徴で、木炭塚と呼ばれています。埋葬施設内からは、鉄剣が1口と鉄鏃数点、刀子2点が出土しました。古墳が築造された時期は6世紀中頃と考えられます。

第2号墳は、直径22m、高さ1.5mの円墳です。埋葬施設は粘土槨と呼ばれるもので、全長4.75m、幅68cm、深さ40cmを測ります。遺物は出土していません。

第3号墳は、直径20m、高さ1.75mの円墳です。墳丘からは円筒埴輪が出土しています。埋葬施設は第2号墳と同じ粘土槨で、全長4m、幅80cm、深さ25cmを測ります。粘土槨の底部の一部には小石が敷き詰められていました。埋葬施設からは鉄鏃20本ほどが出土しました。

第4号墳は墳丘が失われており、確認された周溝から直径約15mの円墳と推定されています。埋葬施設には粘土槨が確認されています。

この他の古墳では、第6号墳と第8号墳で横穴式石室が確認されています。よって、当古墳群は、6世紀中葉から7世紀前半に築造された古墳群と考えられます。

古墳名	墳形	規模(m)	備考
1号墳	前方後円墳	全長25.5、後円部径16.5、前方部幅18、後円部高2.5、前方部高2	木炭塚（全長4.3m）、鉄剣1、刀子2、鉄鏃4、円筒埴輪がめぐっている。
2号墳	円墳	直径22、高さ1.5	粘土槨（全長4.8m）
3号墳	円墳	直径20、高さ1.8	粘土槨（全長4m）、鉄鏃20。円筒埴輪が部分的にめぐる。
4号墳	円墳	直径12	粘土槨（全長2.8m）。戦前頃墳丘消失。
5号墳	円墳	直径20、高さ1.5	*「現存する。」とあるが確認できない。
6号墳	円墳	直径15、高さ3（推定）	昭和20年頃、開鑿のため削平。凝灰岩製の横穴式石室。直刀3出土。
7号墳	円墳		昭和27年頃、伊東重敏氏等調査、円筒埴輪出土。
8号墳	円墳	直径15、高さ4（推定）	永井国一氏宅内、昭和20年頃削平。凝灰岩製の横穴式石室。
9号墳	円墳		戦前頃削平、円筒埴輪出土。
10号墳	円墳		昭和38年以前に墳丘消失。
11号墳	円墳		昭和38年以前に墳丘消失。
12号墳	円墳		昭和38年以前に墳丘消失。
13号墳	円墳		昭和38年以前に墳丘消失。



津田西山古墳群第1号墳円筒埴輪出土状況



津田西山古墳群

1945年2月撮影

津田西山古墳群一覧 [住谷 1982]

津田西山

4世紀

5世紀

6世紀

7世紀

津田西山 第1号墳

### ミニ知識

第1号墳の埋葬施設で、茨城県内各地域に分布し、西日本に

\* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

\* 参考文献：大森信英 1964『勝田市津田・西山古墳群調査報告』勝田市教育委員会 住谷光男 1982『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和38年度調査報告』野本孝明 2011「木炭塚考 - 東日本における木炭塚の基礎的研究 -」『國學院大學学術資料館考古学資料館紀要』27号 國學院大學考古学

**保存運動の展開** 五〇年を超す考古学との関わりの中で多くの遺跡の調査機会に恵まれた。国・県指定の史跡では馬渡埴輪製作遺跡、虎塚古墳、常陸国分寺跡、大串貝塚、真壁城跡などの調査に参加できたし、吉田古墳、台渡里官衙遺跡、泉坂下遺跡、十五郎穴横穴墓群、瓦塚瓦窯跡等の整備にも関わることが出来たのは望外のことであった。

この五〇年間はまた保存運動の五〇年でもあった。保存運動は美浦村陸平貝塚、利根町花輪台貝塚、稲敷市椎塚貝塚、かすみがうら市富士見塚古墳等で展開した。それ以外でも市町村に出向いて保存を働きかけた遺跡はいくつもある。多くは孤立無援の運動であった。初期の運動は関東文化財保存協議会（関文協）と連携し、後に文化財保存全国協議会（文全協）の設立にも参加した。こうした運動の中で何人かの研究者と対立したこともあった。運動はかっこよさの問題ではないし、また研究者としてのステータスの問題でもない。保存運動に無関心でありながら、運動に参加しているように振る舞っている研究者も多い。鹿の子遺跡の保存運動の後、文全協とは運動の理念を共有できずに袂に分かった。

運動は良く地域に根差した保存運動とか、住民本位の史跡整備を主張する。しかし地域に根差した「地域」とは何なのか。「住民本位」とは何を指すのか。だれも明確な回答はだせない。従って掴みどころのない空虚な未熟な運動にしかな

## 出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

### 第19回 遺跡の保存と整備



大串貝塚B地点の発掘調査（1985.8撮影）



川崎 純徳

らない。各地の保存運動を通してようやくたどり着いたのは「埋蔵文化財は国民共有の財産であり、地域の歴史・文化を解明するかけがえのない資料である」という事である。この点こそが行政と研究者をつなぐ基本理念でなければならぬ。遺跡の保存運動とは別に「国立考古学博物館」の県内誘致にも尽力したが、前進していない。

**大串貝塚の調査** 大串貝塚は戦前から著名な貝塚であり、文献に登場する最古の記録としても広く知られている。これによって国の史跡に指定されている。いままでに多くの研究者によって取り上げられてきたが指定範囲は限られており、未指定の部分も多い。このために一九八五年に範囲確認と保存状態の把握のために指定区域外を調査し、良く保存されていることが確認された。その後、指定範囲の拡大は進んでいない。

**陸平貝塚を守る会の運動** 陸平貝塚は日本人による最初の発掘調査が行われた貝塚である。地元の人たちによって保存されてきたが、高度経済成長期の昭和五〇年代に大手不動産会社により買収され存亡の危機に瀕したことがある。このために全国的な保存運動が起こり「陸平貝塚を守る会」が結成され、全国各地から一〇〇を超える団体が保存要望書に名を連ね、現地見学会なども開催され活発な運動が展開された。こうして開発は中止された。現在は国の史跡に指定され、美浦村文化財センターを中心にして調査研究が進められている。

## 箱物整備の是非

日本における史跡整備の在り方は十分に議論されてはいない。国家的には文化庁が進める平城京の整備があるが、あのような箱物整備が正しいのかどうかの検討はない。考古学が科学である以上、その結果に基づいた整備も科学的根拠がなければならぬ。十九世紀以降の歴史研究の支柱は歴史主義である。それは「過去の歴史的事象を有機体として捉え、その生成・発展・死滅の運動」を認識しようとする考え方である。歴史的事象とは民族、国家などの歴史ではない。国家観の象徴として「平城京」の箱物整備はありうるのかもしれないが、それを無限に拡大して良いものだろうか。地域に民族・国家というものがあるのである。地域の歴史には華々しい攻防や日本の中核としての歴史はない。地方には地方の歴史があるのだ。その歴史は何よりも過去の事実に基づくものでなければならぬという実証主義的な主張が込められていることを考えれば時間や空間に関係なく遺構の一部を切り取って並べればいいわけではない。ましてや中央の歴史観の無批判の導入であってはならない。筆者は以下の遺跡整備のほか石岡市内の遺跡整備に関わっている。しかし、まだ先は見通せてない。

## 吉田古墳と台渡里官衙遺跡の整備

吉田古墳 吉田古墳は一九一四年に発見され、柴田常恵、梅原末治、鳥居龍蔵等によって見解が述べられてきた。大正一一年には国指定史跡になる。発見後は壁面もむき出しのままであり整備等の保護策は取ら

れなかった。ようやく平成一七年から整備のための調査が開始され、八角形墳であることが確認され整備事業が本格化している。

水戸市台渡里官衙遺跡は戦前には高井悌三郎氏による発掘調査が行われた。平成七年の水戸市教育委員会による調査により遺構の保存状態も良好であり、二〇〇五年に国史跡に指定された。調査の結果、寺院跡だけではなく那珂郡衙に関わる遺構の存在も確認され台渡里官衙遺跡として整備されることになっている。

## 真壁城の整備

桜川市真壁城跡は平成六年に国の史跡となり、遺構の性格を把握するための調査が進められ、同時に土累等の復元工事も進められてきた。また中城では大規模な庭園跡が確認され注目されている。基本的には発掘調査に忠実に整備することを主眼に考え建物等の復元は基本的に行わないこととしている。

## 泉坂下遺跡の整備

泉坂下遺跡は弥生時代の再葬墓である。現在整備に向けての検討が始められているが、これほど難しい整備はないかもしれない。再葬墓の遺構は土壇という墓穴である。整備の方法によっては無味乾燥な史跡公園となってしまう。展示施設との一体的整備が必要であり、今後のモデルとなる整備をのぞみたい。

\*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一三回『埋文だより』(第四二号)に掲載してあります。

歴史の小窓 その一九

## 身分相応の器

大きな皿の下に、透かしの入った高い脚が付く、この立派な須恵器は、「高盤」といいます。写真の土器は、十五郎六横穴墓群館出支群一区第三五号墓から出土しました。奈良・平安時代には



「高盤」と呼ばれていたようです。市内の集落跡から出土することは少なく、時々破片

がみられる程度です。武田石高遺跡では、八世紀後半の頃、集落で最も大きな住居跡の近くに、須恵器高盤の脚部片が二個体分捨てられていました。もしかするとこれは、武田石高の村に身分の高い客人が来たときなど、そうした客をもてなすための器として、村の大きな家に備えられていたのではなかったらうかと考えています。(佐々木義則)

参考文献 関根良隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館、一九六九 稲田健一編『十五郎六横穴墓群』ひたちなか市教育委員会ほか二〇一六 佐々木義則『武田遺跡群からみた奈良・平安時代の集落』『武田遺跡群総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会ほか二〇一〇

じゅうごろうあなよこあなぼぐんさしぶしぐん

## 十五郎穴横穴墓群指波支群出土の土器

佐々木 義則



横穴内から見た指波支群第 18 号墓の遺物出土状況

1976 年から 1980 年に発掘調査が実施された十五郎穴横穴墓群指波支群の出土遺物は、調査後、明治大学のもとで保管されていました。近年、ひたちなか市にそれらの遺物が移管されたため、未報告資料を含む主な土器について再実測を実施しました。本稿では、再実測により新たにわかったことをご紹介します。

## 指波支群の遺物移管 十五郎穴横穴墓群は、

ひたちなか市中根に所在する古墳時代後期から平安時代にかけての墳墓群であり、総数五〇〇基を超える規模と考えられている「稲田ほか二〇一六」。

指波支群は、一九七六年から一九八〇年にかけて、明治大学を中心とした調査団によって発掘調査が実施され、その成果は『十五郎穴横穴群発掘調査報告書』「大塚ほか一九八一」にまとめられている。調査後は、出土した遺物が数度にわたり、明治大学から市に移管されてきたが、ようやく近年、ほぼすべての遺物が戻されることとなった。そこで、調査から四〇年近くたつこともあり、現在の研究状況からの資料再評価へ向けて、土器の再実測を実施し、気づいたいくつかのことについて述べてみたい。

**土器の年代** 土器の年代は、四点のフラスコ形長頸瓶（二九墓一・八九墓四・墓不明一・二）が七世紀になるほかは、すべて八世紀の土器であり、とくに八世紀前半の土器が多い。また、三五・八九・一〇一号墓のように、同じ横穴墓から出土した土器に時期差がみられるものもあった。

**使用痕の有無** 一般に集落遺跡から出土する土器は、磨滅したり細かく欠けたりという使用痕がみられる土器が多いが、指波支群出土土器は、そのような使用痕がないものが大半を占めていた。使用痕が残る土器は、無台杯（三八

墓一・五一墓一・九）・無台杯蓋（二〇六墓一）・有台杯（三八墓三）・短頸壺（二八墓二）・フラスコ形長頸瓶（八九墓四）である。なお三〇墓一の甕片には研磨痕が認められた。

**器種の構成** 各横穴墓ごとの器種構成をみると、七世紀はフラスコ形長頸瓶のみであったのが、八世紀前半になると、有蓋無台杯を主とし、それに長頸瓶・有蓋有台杯・甕などが少数組み合うようになる。そして次の八世紀後半になると、無蓋無台杯を主とし、有蓋有台杯が少数組み合うようになることがわかった。また指波支群は、いずれの横穴墓においても、器種・量ともに少ないことも指摘できる。

**須恵器の産地** 七世紀のフラスコ形長頸瓶や八世紀初めの肩に稜を持つ長頸瓶（一一墓三・七五墓一・八三墓一）、有蓋有台杯（二〇墓一・三二）は、全て静岡県こさいようの湖西窯産と思われる。また八世紀初めには、土浦市新治窯産の蓋（一〇一墓二・墓不明 B）や、ひたちなか市原の寺瓦窯跡周辺産の有蓋無台杯（二〇墓五・六）もみられた。この後は、八世紀を通して水戸市木葉下窯産が主体となるが、これは集落出土須恵器の様相と同じである。

なお、産地を推定する際に気づいた面白い事例が二つほどあった。ひとつは二〇号墓で、湖西産の有台杯と蓋、原の寺産の無台杯と蓋、木葉下産の無台杯と蓋という、産地が異なる有蓋杯の三つの組み合わせが確認されたことであ

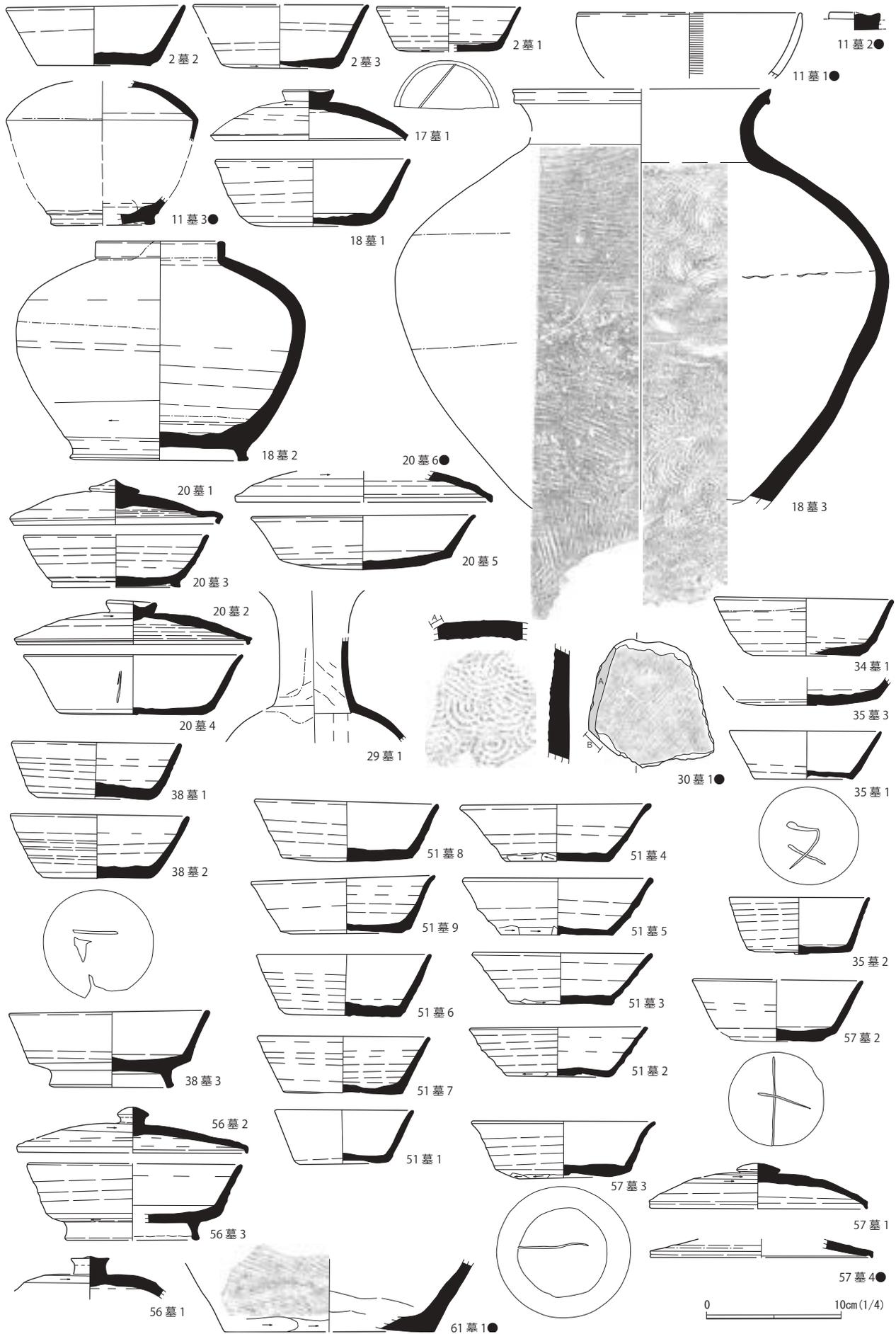


図1 十五郎穴横穴墓群指波支群から出土した土器 (1) (遺物番号は報告書の番号に従ったが、未報告資料は新たな番号と●を付けた。)

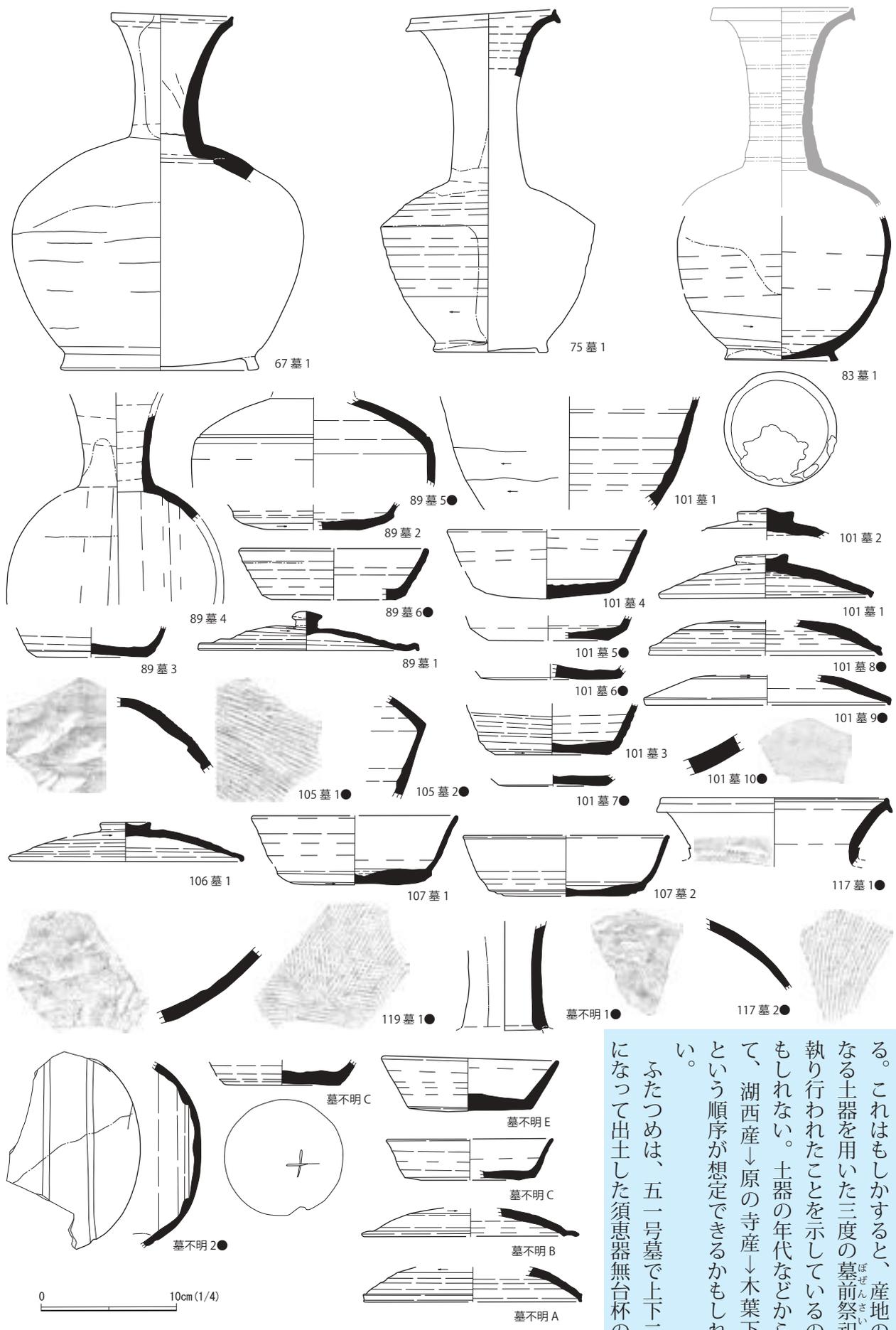


図2 十五郎穴横穴墓群指洪支群から出土した土器 (2)

る。これはもしかすると、産地の異なる土器を用いた三度の墓前祭祀が執り行われたことを示しているのかもしれない。土器の年代などからみて、湖西産↓原の寺産↓木葉下産という順序が想定できるかもしれない。

ふたつめは、五一号墓で上下二段になって出土した須恵器無台杯の産

地を検討したところ、下段が木葉下窯産（五一墓一・六・九）、上段が新治窯産（五一墓一・五）と、産地が分かれたことである。これも二〇号墓同様に、産地の違いが二回の墓前祭祀を示すように思われる。五点の杯（木葉下窯産）を用いた祭祀を終えて、杯を墓前に伏せ置く。やがてそれらが埋まった頃、再び墓前祭祀を執り行い、終了後、用いた杯四点（新治窯産）を、前回同様に墓前に伏せ置いたものではないだろうか。ひたちなか市は木葉下窯産須恵器が主に流通する地域であるが、その地で新治窯産須恵器杯を主体とする儀礼が行われた理由はよくわからなかった。

**おわりに** 二〇一〇年の資料紹介「佐々木・稲田二〇一〇一や二〇一六年の報告書」稲田ほか二〇一六、そして今回の再報告によって、十五郎穴横穴墓群出土土器の様相がかなり明らかとなった。今後はそれらのデータをもとに、解明が進むことを期待したい。

なお本稿をなすにあたり、多くの御教示を稲田健一氏から頂きました。最後に記し、感謝申し上げます。

#### 参考文献

大塚初重ほか一九八一『十五郎穴横穴群発掘調査報告書』勝田市教育委員会、佐々木義則・稲田健一「十五郎穴横穴墓群出土の須恵器」『ひたちなか埋文だより』第三十三号、ひたちなか市埋文文化財調査センター、稲田健一編二〇一六『十五郎穴横穴墓群』ひたちなか市教育委員会、ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

#### 土器説明 (11 墓 1 の土師器以外は全て須恵器である。口径等の法量は cm。胎土は特徴的な混入物を記した。)

- 2 墓 1 前庭部出土。杯。残存は底部 50%、体部 30%。口径(10.6)、器高 3.4、底径(7.2)。灰色。胎土は砂(白)、骨針微量。底部外面回転ヘラ削り後、ヘラ記号。焼成硬質。体部外面の一部に降灰。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 2 墓 2 口径部 40%欠失する杯。口径 13.0、器高 4.4、底径 8.3。灰色。胎土は礫(白、灰)、骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 2 墓 3 前庭部出土。杯。残存は底部 85%、体部 50%、口縁部 25%。口径(12.8)、器高 4.7、底径 8.7。灰色。胎土は礫(白、灰少)、砂(白、白透少)、骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 11 墓 1 未報告。土師器碗。残存は体部 20%。口径(16.4)。外面明褐色、一部橙褐色。内面明褐色、橙褐色、黒色。胎土は砂(透、白、黒色スコリア)、骨針微量。外面は磨耗により不明瞭だが、横方向の手持ちヘラ削りの後、ヘラミガキが施されている可能性あり。内面はヘラミガキ。色調からみて内面黒色処理の可能性あり。
- 11 墓 2 未報告。蓋。鈕部のみ。鈕径(3.8)、鈕高(0.5)。灰色。胎土は礫(白)、骨針微量。
- 11 墓 3 未報告。長頸瓶。残存は肩部 30%、高台部付近 40%。高台径(7.7)。灰色。胎土は礫(白微)。底部外面回転ヘラ削り。底部内面に緑色・褐色釉および窯体小片付着。肩部外面に斑点状に緑色釉付着。湖西窯産か。
- 17 墓 1 無台杯蓋。残存は 40%欠失、鈕端部若干欠失。口径 14.0、器高 3.8、鈕径 3.6、鈕高 0.9。明灰色、内面天井部明灰褐色、口縁部外面暗色化。胎土は礫(白少)。天井部外面回転ヘラ削り。逆位蓋+正位杯の重ね焼き。使用痕なし。
- 18 墓 1 杯。残存は口縁部 15%欠失。口径 14.1、器高 5.0、底径 9.3。灰色。胎土は礫(白、灰少)、骨針少。回転ヘラ削り。底部外面 1 方向手持ちヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 18 墓 2 短頸甕。完形。口径 9.3、器高 16.3、高台径 13.1。外面上半部白褐色自然釉、下半部暗灰色、高台部付近灰色、底部白褐色。内面灰色。胎土は礫(白、灰少)。底部外面が径 8.6cm ほどの円形に白褐色化する。焼台痕か。外面胴下半回転ヘラ削り。口縁部内面から胴部外面中位にかけて自然釉。内面底部薄く自然釉。高台端部細かく欠失。
- 18 墓 3 甕。底部欠失、肩部 15%欠失、口縁部ほとんど欠失。口径(18.9)。茶褐色、外面底部付近一部灰褐色。胎土は礫(白、白透、灰少)、骨針多。胴部外面横位平行叩き。外面底部付近不整方向の平行叩き。胴部内面同心円文当て具痕。頸部ヨコナデ。胴部外面の最大径付近があばたに荒れる。木葉下窯産か。
- 20 墓 1 無台杯蓋。口唇部 15%欠失。口径 15.0、器高 3.4、鈕径 3.7。明灰色、外面に広く濃緑色釉。胎土は細かな黒色吹きだし。外面全体に濃緑色釉がかかり、口縁部の一部に正位蓋+正位杯の重ね焼き痕。湖西窯産か。
- 20 墓 2 無台杯蓋。口縁部 20%欠失。口径 17.0、器高 3.2、鈕径 3.8。灰色。胎土は礫(白、灰少)、骨針。天井部外面回転ヘラ削り。内外面に正位杯+逆位蓋の重ね焼き痕。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 20 墓 3 有台杯。残存は底部 45%、体部 25%。口径(13.4)、器高 3.9、高台径(9.3)。明灰色。胎土は砂(白少)。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。体部外面ごく薄く自然釉。湖西窯産か。
- 20 墓 4 完形の杯。口径 16.0、器高 4.5、底径 11.7。明灰色。胎土は礫(白、灰少、白透少)、骨針少。回転ヘラ削り後底部外面回転ヘラ削り。体部外面ヘラ記号?。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 20 墓 5 杯。口径部 40%欠失、体部 20%欠失。口径 16.3、器高 4.0、底径 12.7。外面黒色、内面褐色。胎土は礫(白多、白透多)、砂(白多、白透多、透多)。底部外面回転ヘラ削り。正位杯を積む重ね焼きか。使用痕なし。原の寺瓦窯跡周辺産か。
- 20 墓 6 未報告。蓋。残存は口縁部 25%。口径(18.8)。外面黒色。内面灰褐色、口縁部黒色。胎土は砂(透多、白、灰少)。天井部外面回転ヘラ削り。原の寺瓦窯跡周辺産か。胎土・色調からみて杯 5 の蓋の可能性あり。
- 29 墓 1 フラスコ形長頸瓶頸部下半。明灰色。外面部分的に緑色釉。湖西窯産か。
- 30 墓 1 未報告。前庭部出土。甕胴部片。灰色。胎土は砂(透)。外面平行線文叩き。内面同心円文当て具痕。焼成硬質。破面の一部に研磨痕 A・B が認められる。
- 34 墓 1 前庭部出土。杯。底部 20%欠失。口径 13.0、器高 4.8、底径 7.9。暗青灰色。胎土は礫(白、透少)、細砂粒。回転ヘラ削り後未調整。焼成硬質。口縁部外面重ね焼き痕。使用痕なし。
- 35 墓 1 完形の杯。口径 11.1、器高 3.6、底径 7.2。灰色、暗灰色。胎土は礫(白)、砂(白、透少)。回転ヘラ削り。底部外面ヘラ記号「又」。使用痕なし。
- 35 墓 2 完形の杯。口径 10.2、器高 4.2、底径 7.6。外面底部灰色、体部黒灰色。内面底部明灰色。体部全体に緑色・明褐色自然釉が厚くかかる。胎土は礫(白、灰少)。回転ヘラ削り。同器種正位重ね焼き痕。使用痕なし。
- 35 墓 3 杯。残存は底部 70%。底径(10.6)。明灰色。胎土は礫(白少、白透少)、砂(白、透多)。回転ヘラ削り。使用痕なし。
- 38 墓 1 杯。口径部 15%欠失。口径 12.3、器高 4.2、底径 8.2。灰色。胎土は礫(白、灰少)、骨針少。焼成硬質。回転ヘラ削り。底部外面ヘラ記号「一」。外面底部周縁および口唇部若干磨減。木葉下窯産か。
- 38 墓 2 杯。体部 20%欠失、底部若干欠失。口径 13.0、器高 4.7、底径 8.1。明褐色、明灰褐色、白褐色。胎土は砂(白、灰少)、骨針少。底部外面 1 方向手持ちヘラ削りの後、ヘラ記号。焼成やや軟質。使用痕なし。外面の 1/3 ほどが荒れている。木葉下窯産か。
- 38 墓 3 完形の有台杯。口径 14.6、器高 5.6、高台径 8.3。灰色。外面薄く自然釉(高台内側除く)。胎土は礫(白、灰少)、骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。逆位蓋+正位有台杯の重ね焼きか。磨減はみられないが高台端部が若干欠失する。木葉下窯産か。
- 51 墓 1 完形の杯。口径 10.0、器高 4.0、底径 6.5。明灰色。胎土は礫(白、白透少、灰少)、骨針微量。回転ヘラ削り。焼成硬質。外面底部周縁および口唇部磨減。木葉下窯産か。
- 51 墓 2 杯。底部の一部欠失。口径 12.9、器高 3.6、底径 7.6。灰色。胎土は砂(白、透少)、白雲母少。回転ヘラ削り。外面底部 1 方向・体部下端手持ちヘラ削り。使用痕なし。新治窯産。
- 51 墓 3 杯。口縁部 10%欠失。口径 13.1、器高 3.9、底径 7.5。外面明灰褐色、灰色。内面灰色。胎土は礫(白透少)、砂(白、白雲母)。回転ヘラ削り。外面底部 1 方向・体部下端手持ちヘラ削り。使用痕なし。

- 51 墓4 杯。口縁部 20% 欠失。口径 13.8, 器高 4.2, 底径 7.7。灰色。口縁部一部明灰色。胎土は礫(白透少), 砂(白, 白透)。回転ヘラ切り。外面底部 1 方向・体部下端手持ちヘラ削り。使用痕なし。新治窯産。
- 51 墓5 ほぼ完形(体部若干欠失)の杯。口径 13.7, 器高 4.3, 底径 8.3。灰褐色, 底部内面灰色。胎土は礫(白少, 透少), 砂(白), 白雲母。回転ヘラ切り。外面底部 1 方向・体部下端手持ちヘラ削り。使用痕なし。53 号墓出土の口縁部と接合。新治窯産。
- 51 墓6 完形の杯。口径 12.7, 器高 4.6, 底径 8.6。灰色。口縁部外面暗色化。胎土は礫(白, 灰少, 白透少), 骨針微量。回転ヘラ切り。内面全体に降灰し口縁部外面が暗色化するので, 同器種正位重ね焼きの最上位に置かれたか。使用痕なし。焼成硬質。木葉下窯産か。
- 51 墓7 完形の杯。口径 12.5, 器高 4.2, 底径 8.8。赤味を帯びた灰褐色。胎土は礫(白, 白透少, 灰少, 透少), 骨針少。回転ヘラ切り。口縁部外面暗色化(重ね焼き痕)。底部内面に明褐色付着物あり。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 51 墓8 杯。体部若干欠失。口径 13.3, 器高 4.4, 底径 9.6。赤灰色。口縁部外面暗灰色化。胎土は礫(白, 灰少, 透少), 骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。同器種正位重ね焼き。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 51 墓9 ほぼ完形(口縁部若干欠失)の杯。口径 13.4, 器高 4.1, 底径 9.6。明褐色。内面底部付近やや暗色。胎土は礫(灰, 白少, 白透少), 骨針微量。回転ヘラ切り。底部外面に部分的な一方向ヘラ削り。口唇部内側やや磨減。焼成軟質。木葉下窯産か。
- 56 墓1 有台杯蓋の鈕部。周縁若干欠失。天井部 45% 残る。鈕径 2.8, 鈕高 1.3。灰色。胎土は礫(白, 灰少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。木葉下窯産か。
- 56 墓2 有台杯蓋。口縁部 60% 欠失, 体部 40% 欠失。口径(16.8), 器高 3.4, 鈕径 2.3, 鈕高 1.3。灰色。口縁部内面暗色。外面白褐色降灰。胎土は礫(白, 灰少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。正位蓋+正位有台杯の重ね焼きか。木葉下窯産か。
- 56 墓3 有台杯。残存は底部 35%, 体部 30%, 口縁部 20%。口径(15.6), 器高 5.7, 高台径(9.5)。灰色。胎土は礫(白少, 灰少), 骨針少。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。色調からみて逆位蓋+正位有台杯の重ね焼きか。
- 57 墓1 無台杯蓋。口縁部 55% 欠失。口径(15.9), 器高(3.2), 鈕高 0.8。明灰色。胎土は礫(白, 灰, 白透)。天井部外面回転ヘラ削り。内面器面表面あばた状。使用痕なし。
- 57 墓2 杯。体部 75% 欠失。口径(12.4), 器高 4.6, 底径 6.8。灰色。胎土は礫(白少, 灰少), 黒色吹き出し。底部外面に緑色・明褐色釉が厚くかかる。体部外面に薄く釉がかかる。底部外面ヘラ記号。焼成硬質。使用痕なし。木葉下窯産か。89 号墓出土資料と接合。
- 57 墓3 杯。口縁部 20% 欠失, 体部若干欠失。口径 13.4, 器高 4.2, 底径 10.0。灰色。胎土は礫(白, 灰少), 骨針少。回転ヘラ切り。外面底部外周手持ちヘラ削り。底部外面ヘラ記号「一」。外面に赤錆色の土が付着する。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 57 墓4 未報告。蓋。残存は口縁部 10%。口径(16.3)。明灰色。胎土は砂(透, 白, 灰), 骨針微量。焼成やや軟質。木葉下窯産か。
- 61 墓1 未報告。費か鉢。残存は底部外周 60%。底径(15.6)。明灰色。胎土は礫(白透少), 白雲母。胴部外面斜方向平行線文叩きの後, 胴部下半横方向ヘラ削り。底部外面器表面ざらつく。胴部内面横方向ナデ。焼成やや軟質。新治窯産。同一個体と思われる破片 3 点のうち, 最も大きい資料を実測した。
- 67 墓1 長頸瓶。肩部若干欠失, 口縁部 20% 欠失。口径 8.8, 器高 26.4, 高台径 14.4。灰色。外面底部明灰色, 胴部内面明灰色。胎土は礫(白, 灰少)。胴部は全体的にナデ調整により平滑な器面となっているが, 下半部に薄く回転ヘラ削りの痕跡が残る。外面胴部下端ヨコナデ。肩部全体と頸部の一部に降灰。木葉下窯産か。
- 75 墓1 当資料は『勝田市史考古資料編』に写真のみ紹介されている。指洪支群の 1 次調査で出土した遺物である。完形の長頸瓶。口径 10.5, 器高 25.2, 高台径 8.2。灰色。外面胴部下半回転ヘラ削り。頸部基部に濃緑色釉が厚くかかる。外面は肩部全面および頸部と胴部の一部に緑色釉が薄くかかる。内面に薄く緑色釉がかかる。底部外面中央部白褐色釉がかかる。焼成硬質。使用痕なし。湖西窯産か。
- 83 墓1 長頸瓶の底部。下半部 60% 欠失。高台径 8.2。明灰色。胎土は砂(白少)。外面胴部上位と高台外面および底部内面の一部に緑色釉がかかる。底部外面に黒土付着。外面胴部下端から底部にかけて回転ヘラ削り。湖西窯産か。報告書では同一個体と思われる上半部が図化されているが, 明治大学からの返却資料中には見当たらない。
- 89 墓1 有台杯蓋。口縁部 20% 欠失。口径 16.0, 器高 2.9, 鈕径 2.2, 鈕高 1.2。灰色。口縁部外面暗色化。胎土は礫(白少, 灰少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。逆位蓋+正位有台杯を上下逆にしながら積む重ね焼きか。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 89 墓2 杯。残存は底部 30%。底径(11.8)。灰褐色。胎土は砂(灰), 骨針少。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 89 墓3 杯。残存は底部 55%。底径(8.1)。灰色。胎土は礫(白透少, 灰少), 骨針少。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 89 墓4 フラスコ形長頸瓶。残存は頸部下半, 肩部 30%。明灰色。外面肩部に緑色釉がかかる。頸部上端の破面が一部やや磨減することから, 口縁破損後に再生された可能性がある。湖西窯産か。
- 89 墓5 未報告。長頸瓶。残存は肩部 15%。青灰色。胎土は砂(白少, 白透少)。肩部に 1 条の沈線をもつ。焼成硬質。搬入品か。
- 89 墓6 未報告。杯。残存は体部 15%, 底部外周 20%。口径(13.6), 器高 3.8, 底径(9.1)。灰色。胎土は礫(白)。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。口縁部外面暗色化。木葉下窯産か。
- 101 墓1 蓋。口縁部 50% 欠失。口径 15.4, 器高 3.2, 鈕径 3.9, 鈕高 0.7。明灰色。胎土は礫(灰, 白少, 白透少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。色調から逆位蓋+正位杯の重ね焼きか。
- 101 墓2 蓋鈕部付近。鈕径 4.2, 鈕高 1.0。灰褐色。胎土は礫(白透多, 白), 白雲母多。天井部外面回転ヘラ削り。新治窯産。
- 101 墓3 杯。残存は底部 60%。口径 8.2。灰色。胎土は礫(白少), 骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓4 杯。体部 60% 欠失。口径(14.4), 器高 5.1, 底径 11.2。明灰色。胎土は礫(明灰少), 砂(白少, 灰少, 透少), 骨針少。外面底部回転ヘラ削り。焼成軟質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓5 未報告。杯。残存は底部 20%。底径(8.8)。灰色。胎土は砂(白, 白透, 灰少), 骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓6 未報告。杯。残存は底部 20%。底径(10.3)。灰色。胎土は砂(白少), 骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り?。焼成やや軟質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓7 未報告。杯。残存は底部 25%。底径(8.0)。灰色。胎土は礫(灰), 砂(白)。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓8 未報告。蓋。残存は 30%(鈕欠失)。口径(17.0)。明灰色。胎土は小石(灰チャート少), 礫(灰少, 白少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。焼成やや軟質。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 101 墓9 未報告。蓋。残存は口縁部 15%。口径(17.9)。白褐色。胎土は礫(チャート少), 砂(白透, 白少, 灰少)。天井部ヘラ削り。焼成硬質。木葉下窯産か。
- 101 墓10 未報告。出土位置不明。裏底部片。灰色。胎土は砂(白)。外面平行線文叩き。焼成硬質。外面部分的に光沢あり。
- 101 墓11 未報告。長頸瓶。灰色。外面胴部下半回転ヘラ削り。内面口クロ痕顕著。焼成硬質。湖西窯産か。
- 105 墓1 未報告。裏胴上部片。灰色。胎土は砂(白透, 透)。外面斜位平行線文叩き。内面円形当て具痕。焼成硬質。産地不明。
- 105 墓2 未報告。長頸瓶肩部片。灰色。外面胴部下半回転ヘラ削り。肩部上面に薄く緑色釉がかかる。焼成硬質。湖西窯産か。
- 106 墓1 蓋。残存は天井部, 口縁部 10%。口径 16.9, 器高 2.9, 鈕径 3.7, 鈕高 0.6。明灰色。胎土は砂(白透, 灰), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。鈕周縁部が磨減する。逆位蓋+正位杯の重ね焼きか。木葉下窯産か。
- 107 墓1 杯。体部 90% 欠失。口径(15.0), 器高 5.1, 底径 11.3。外面灰褐色, 底部一部灰色。内面灰色。胎土は礫(灰少, 白少), 砂(白, 灰少), 骨針少。回転ヘラ切り後, 底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。
- 107 墓2 杯。残存は底部 70%, 体部 10%。口径(14.8), 器高 4.5, 底径(9.2)。明灰色, 明灰色。胎土は礫(白, 灰, 透少), 骨針微量。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。使用痕なし。木葉下窯産か。口縁部片が接合したため全形が判明した。
- 117 墓1 未報告。裏。残存は口頸部 20%。口径(16.5)。青灰色。胎土は礫(白, 白透少), 砂(白, 白透), 骨針。外面頸部下端に叩き具圧痕。焼成硬質。木葉下窯産か。
- 117 墓2 未報告。裏胴部片。外面暗灰色, 内面青灰色。胎土は砂(白), 骨針微量。外面縦位平行線文叩き。内面無文円形当て具の後, ナデ。焼成硬質。木葉下窯産か。
- 119 墓1 未報告。裏胴部片。青灰色。胎土は砂(白)。外面平行線文叩き。内面無文円形当て具。焼成硬質。外面部分的にやや磨減する。
- 墓不明 A 蓋。残存は口縁部 30%(口唇部 10%)。口径(15.9)。明褐色。胎土は礫(白少, 灰少), 骨針微量。天井部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。木葉下窯産か。
- 墓不明 B 蓋。残存は口縁部 30%。口径(15.6)。外面明褐色, 内面黒灰褐色。胎土は礫(白透多, 白), 白雲母多。天井部回転ヘラ削り。焼成硬質。新治窯産。
- 墓不明 C 杯底部。底径 8.5。灰色。胎土は礫(白, 白透少, 灰少)。外面底部中央 1 方向手持ちヘラ削り。木葉下窯産か。
- 墓不明 D 杯。残存は体部 20%, 底部 60%。口径(11.8), 器高 3.1, 底径(9.2)。灰色。胎土は砂(白, 透少, 灰少)。底部外面ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 墓不明 E 杯。体部 15% 欠失。口径 12.7, 器高 3.9, 底径 9.0。灰色。胎土は礫(白, 白透, 透少), 砂(白多, 透少, 灰少), 骨針。底部外面回転ヘラ削り。使用痕なし。木葉下窯産か。
- 墓不明 1 未報告。長頸瓶(フラスコ形)頸部(口縁部欠失)。明灰色。外面の一部に緑色釉が流れる。焼成硬質。湖西窯産か。
- 墓不明 2 未報告。フラスコ形長頸瓶胴部片。明灰色。外面 2 条の沈線をもつ。閉塞部にうすうすと円形のひびが入る。上部にまだら状に緑色釉がかかる。内面円形の閉塞部をもつ。底部にまだら状に緑色釉がかかる。湖西窯産か。

## 指洪支群第 51 号墓の杯の出土状況

# 文の文 センターの日 2017 前期

4月

1 クラブツアーリズム見学／12 虎塚古墳一般公開／4 『君ヶ台遺跡試掘調査』／『ひたちなか市役所新人研修』／『虎塚古墳一般公開』



12-14 赤坂遺跡試掘調査／18-21 高野富士山遺跡試掘調査／25-28 水戸市稲荷第一小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】

5月

2 津田小学校6年生社会科見学／杉岡真人氏より資料寄贈【アカシ化石】／6 大きくなりました（ふる考卒業生）



9 中根小学校3年生社会科見学



14 第14回企画展「古代常陸の製塩土器」終了／16 はまぎくの里見学



20 ワンケースミュージアム42「貝殻で付けた文様」開始／23NHK水戸「いば6」取材



23 国府田良樹氏（神栖市歴史民俗資料館）資料調査（後野遺跡細石刃ほか）／市毛上坪遺跡試掘調査開始／24 中根小学校6年生社会科見学／25 那珂市菅谷西小学校6年生社会科見学／26 遺跡巡り／29 勝倉若宮遺跡本調査開始／31 外野小学校3年生社会科見学

生社会科見学



6月

1 市毛上坪遺跡試掘調査終了／2 那珂市菅谷東小学校6年生社会科見学



2 勝倉若宮遺跡本調査終了／8 田彦小学校3年生社会科見学／10 二東日本古墳出現期土器研究会／13 本郷東遺跡試掘調査／15 神栖市歴史民俗資料館第42回企画展「水河時代の動物たち〜茨城にノウマシゾウがいたころ〜」へ資料貸出【後野遺跡細石刃ほか】／16 鉦田市旭北小学校6年生社会科見学／20 那珂湊第三小学校6年生社会科見学／22 茨城大学出前授業「埋文センターの活動について」／24 小美玉市老人会ゆうゆうクラブ見学／29 茨城大学出前授業【虎塚古墳について】

## 虎塚古墳 花便り

19 ギンリョウソウ

虎塚古墳の墳丘には、とても珍しい花が咲きます。今回ご紹介する花は、二〇一七年にはじめてみつけた「ギンリョウソウ（銀竜草）」です。ギンリョウソウはシヤクシヨウソウ科の多年草で、腐生植物としてはもっとも有名なものの一つとされます。別名ユウレイタケともいうそうです。四月から八月ごろに約一五cmほどの花茎を伸ばします。花に色素はなく全体が透けた色をしています。花が咲くと柱頭は紺色をしています。茎には鱗片状の葉を多数つけ、花の形からこの名が付いたとされます。

今回の花は、私が谷川岳を登山したときに見かけた花で、百名山などを紹介する番組でもよく登場します。なので、虎塚古墳で咲いているのをみつけたときには、とてもびっくりしました。こんな珍しい花が咲く「虎塚山」が、「花の百名山」に登録されてもおかしくないなあと思っております。（稲田健一）



2017.5.18

7月

山形県うきたむ風土記の丘考古資料館見学



6-7 野沢前遺跡試掘調査 / 8 毛野考古学研究所研修会 / 9 ワンケー スミュージアム42終了 / 12 長堀小学校3年生社会科見学 / 15 博物館実習施設見学(茨城キリスト教大) / 22 ふるさと考古学①「楽しい考古学」(講師・さかいひろ氏) / 22 ワンケー スミュージアム43「平成28年度鷹ノ巣遺跡発掘調査速報展」開始 / 23 ふるさと考古学②「石と友だちになろう」(講師・矢野徳也氏) / 8月 9 ひたちなか市中央図書館史跡めぐり見学 / 11 ふるさと考古学③「石の道具をつかう」(講師・鈴木八重子) (下段右写真) / 15 公益財団法人元興寺文化財研究所夏季企画展「鎮物としての武具」へ資料貸出(武田西郷遺跡小札ほか) / 17



田彦小学校3年夏休みの宿題対応 / 20 ふるさと考古学④「石の道具をつくる」(講師・萩野谷悟氏) / 20-27 博物館実習(茨城大学・駒沢大学・中央大学)



22-24 岡田遺跡試掘調査 / 22-25 柴田遺跡試掘調査 / 23 水戸教育事務所管内文化財巡視報告会 / 25 ミュージアムパーク茨城県自然博物館へ資料貸出(上の内貝塚垂飾) / 27 ふるさと考古学⑤「石の道具をつくる2」(講師・鈴木素行)



9月 1 神栖市歴史民俗資料館より資料

返却 / 2 紺野雅夫氏より資料寄贈(堀口遺跡採集高杯脚部) / 3 福島県視覚障がい者協会見学特別展示会



6 岩宿博物館第64回企画展「石器から地域の違いをみる」へ資料貸出(武田石高遺跡ナイフ形石器ほか) / 8 東那須野公民館おもと学級見学 / 10 ワンケー スミュージアム43終了 / 12 三反田遺跡本調査開始 / 12-20 金上向山遺跡試掘調査 / 26 市毛下坪遺跡試掘調査開始 / 27 橋本勝雄氏(千葉県教育振興財団)資料調査(向野遺跡ほか石器) / 30 ふるさと考古学⑥「石をみにいこう」(講師・田切美智雄氏)

入館者状況 (2017.4.1 ~ 2017.9.30)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	1290	4 (0)	118	(0)	1408
5月	26	348	7 (5)	479	(423)	827
6月	26	180	7 (4)	338	(286)	518
7月	26	154	6 (2)	279	(135)	433
8月	27	293	14 (0)	234	(0)	527
9月	26	141	3 (0)	103	(0)	244
合計	157	2406	41 (11)	1551	(844)	3957

( )内は学校数

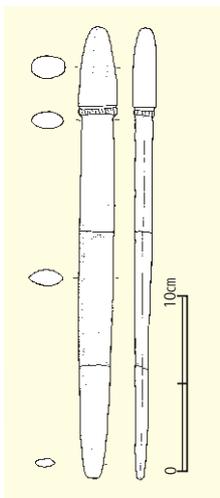
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。  
http://business4.plala.or.jp/h-lcs/

大田房貝塚の石剣

表紙のモデルが手にしているのは、市内柳沢の大田房貝塚から出土した縄文時代晩期の石剣です。大田房は「だいたぼう」、金上の大房地遺跡も「おおぼっち」と読み、これらは「常陸国風土記」に登場する巨人、ダイダラボウに関連した地名のようです。

石剣は、長さ256mm、幅22mm、厚さ13mmで、幅も厚さも最大値は頭部にあります。石剣の長さは30cmほどが一般的なので、やや小型と言えるでしょう。重さは77.0g。石材は田切美智雄氏により、八溝山系の粘板岩と観察されています。頭部の下端に線刻があり、横線で区画された中に縦の線が刻まれています。体部は両側が尖り、まさに石製の剣といった形状です。その下半には、研磨に伴う擦痕が明瞭に残されています。全体的に赤みを帯び、表面は粉が吹いたような質感です。これは、火を受けた痕跡と考えられます。

石剣は破片で出土することが多く、このように完全な形に復元されるものは稀です。「藤本弥城先史資料」の一つで、現在、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに展示されています。



ひたちなか埋文だより 第47号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

2017年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

表紙のモデルは富田真歩さんです。提灯は後藤みち子さん、甚平は蓼沼香未由さんからお借りしました。